

オーストリアでのドイツ語

倉 田 稔

オーストリアでのドイツ語の体験のいくつかを記そう。

ドイツ語には、大きく分けて北ドイツ語と南ドイツ語がある。オーストリアでは南ドイツ語である。それにまたオーストリアでも方言がある。オーストリア語で代表的なものは、ウィーン語(ウィーナリッシュ)であり、これも、ホッホ・ドイチュ、いわゆる正式ドイツ語とは違う。

私がウィーンで住んでいた友人Kさんの母であるオーマ(おばあさん)は、ウィーン語を話すから、初めは、僕にはよく分からなかった。友人Kさんは、「オーマは本格的ドイツ語が喋れない」と言う。僕は半年たってようやく、オーマのウィーン語が分かるようになった。オーマも後に、「私も、お前さんのようにホッホ・ドイチュを習おう」と言うのだ。

外国で、数字文字は、日常生活で最も重要である。さて私は、銀行で用紙に7と書いたら、 $\overline{7}$ と、中央に点を打つのがオーストリア流だと、銀行員に言われた。ついでに数字のことを言えば、ここでは、1 2 4 9は、それぞれ $\overline{1}$ $\overline{2}$ $\overline{4}$ $\overline{9}$ と書いている。ヨーロッパではそうらしい。

私は、ウィーン市の中心にある、ゲーテ・インスティトゥート方式のドイツ語学校を訪ね、ドイツ語コースの申し込みをした。ウィーンにはこれ以外にも幾つかドイツ語学校がある。「イキ」と言う学校、ウィーン大学付属の外国人向けドイツ語学校、市役所主宰の学校などがある。私はウィーンに長期留学すると、いつも必ずドイツ語学校に入っていた。

現在(少なくとも1991年の話)では、この学校は、初級1, 2, 3, 中級1, 2, 3, 上級の7つの段階がある。それぞれ2カ月コースである。月曜から金曜まで毎日たっぷり3時間の授業である。午前と午後と夜のクラスがある。初級1のクラスはクラス数が多く、上の段階のに行くほどクラスが少なくなり、ピラミッドのようになっている。東欧変革のため多くの東欧人がウィーンに来ているので、昔にくらべてクラスが急増している。ドイツ語ができなければ生活ができないから、こういう外国人は必死にドイツ語を学んでいる。中級3を修了合格すると、ウィーンで就職ができる。私も、せっかくなので、受験して、青息吐息だったがこれに合格した。

この先生の長年の経験によると、同じように努力しても、アジア人よりヨーロッパ人の方が、ドイツ語の出来は少しよいとのことである。言葉と文法が共通しているからである。

オーストリアの新聞を読むのも、やさしくはない。例えば『プレッセ』は、ドイツ語としては言い回しが難しい。低俗紙『クローネン・ツァトゥング』などは、俗な言葉が使われていて、日本人には難しい。『クーリエ』などは、日本のドイツ語辞書にない言葉が沢山有る。ウィーン語だからである。文章が適当なものは、『スタンダード』や『サルツブルガー・ナハリヒト』でしょうと、ドイツ語の先生が言うので、私はそれらを読むことから始めた。

オーストリア政府留学生の時、面白いので、ウィーン大学に入学してみた。日本の大学教養課程2年を修了していると、入学資格がある。ただし、大学のドイツ語入学試験に合格する必要がある。これで学生 (ordentlicher Hörer または ordentliche Hörerin) になれる。なお、ラテン語をたっぷりと履修している必要がある。そうでない人は入学後、ラテン語の試験を受けて、合格しないと卒業はできない。私は、従って、入学後、ウィーン大学のラテン語講義に出席しなければならなかった。

さて問題は、ドイツ語入学試験である。その試験は、動詞の前綴り、Vorsilbe あるいは Präfix であった。基本的な動詞に、前綴りがつく、例えば、vor- ver- be- an- ent- er- などである。1人ずつ、10題の問題で試験をされ、基本的動詞と前綴りのある動詞の違いを説明するものであった。私は当時それが殆どできなかつたので、これは難しい試験かもしれない。私は「お情け」で入れてもらった。

ウィーン大学に入学した時、S先生にドイツ語を習った。外国人向けのドイツ語クラスに参加した。このドッペル・ドクター (ドクトル位を2つ持つ)・S女史の授業であった。当時すでに中年のおばさんであった。当時、彼女のクラスの1つで、リチャード・リケットの『オーストリアの歴史』がテキストになっていた。最近、邦訳が出た (成文社 1995年)。

ウィーンに長く住んでいるある日本人は、「あの授業は役に立たない」と言って、彼女をけなしていた。しかし週2回か3回の授業 (各45分) では、学生は上達しない。回数の問題である。彼女は実際はよい先生で、学生をカフェに連れて行ってスライドを見せてくれたり、ホイリゲへ行ってワインとともにお喋り会を催した。外国人教育に長く携わってきたので、理解がある。ただし私もそこでは回数が少ないので、途中で気が付いてやめたのではあるが。

わが友人Kさんの家の食堂の壁に、ドイツ語の定冠詞の性・数・格変化の書き付けが貼ってある。オーマが孫娘のために作ったのだ。友人Kさんの前で、私がそれを空んじたら、彼はドイツ語の「格変化の表を忘れてしまった」という。彼は格変化は本能的にできるのだそうだ。ドイツ人だから文法表は知らないし、いらぬ。

ドイツ語には性があり、「僕はそれをよく覚えられない」と言った。「女」「花」などが女性で、「男」「少年」が男性だということは分かる、しかしなぜ、「机」が男性で、「少女」が中性なのか、分からない。」だが友人は「我々は本能的に分かる。どの語が男性名詞か女性か中性かは、教わらなかつたが、身体で知っている」と言う。

私は昔、ウィーンにいた知人の下宿を、訪れたことがあった。知人の大家さんは、オーストリア人老女性であつて、その父親が男爵で、ハプスブルク帝国時代の蔵相だった。私が彼女に向かって普通にドイツ語を喋っていたら、「イヒ [ich, 私は] 抜きで話をするものなのですよ」という。びっくりした。ちょうど日本語と同じである。だがそれを聞いたとたん、私は喋れなくなった。それを思い出して、友人Kさんに言った。

「オーストリアでは昔の時代、貴族社会では、イヒ抜きで喋った、と聞いたことがある。」

彼は言った。「それは昔は成り立ちうる。貴族はイヒ [私] と言わなくても、イヒは自分だという環境にいるからね。最近はイヒが沢山入る。エゴイズムと個人主義のせいだろう。」

私はある時、知人B氏に私的な葉書を書いたことがある。「イヒ」抜きの文章で書いてみた。彼

はしばらくして、私と合った時、「母が、随分美しいドイツ語を書く日本人だ」と言っていた、と語った。この人は多分、ハプスブルク時代の女性だったのだろう。

ウィーンの知人は私に、「日本人は、イヒと言うから分からない」と苦情をこぼす。「ich」の終わりのヒの部分には i が入っていないので、ヒからイを取り去ってもらわないと困ると言うのである。

友人Kさんは言う。「『私』でなく、2人称の話だが、オーマは、ズィー（『貴方』の敬称、あるいは遠称）で話すことを望んでいる。尊敬されることを望んでいるからね。」ドイツ語では、遠称・敬称はズィー（Sie）であり、近称・親称はドゥ（du）と言う。それにまた、オーマは、「オーマ」と呼ばれることを好む。若い人に、名前の「ベティ」でなんか呼ばれるのは拒否する。

友人Kさんは続ける。「またオーマは挨拶を重視する。『ハロー』などとは、トンでもない。しかし娘はそれを知っていて、わざと『ハロー』と言う。」「日本人と同じだね。」特に古い日本人と全く同じ発想である。人間はどこでも違いがないのだなと感心してしまった。なお私も、オーマに「ハロー」と言っていたので、ドキンとした。

「中央ヨーロッパでは、どの職業の人が一番長生きするか」と、私は謎を掛けた。友人もその奥さんも、あれかこれか、何だろうな、などと考え出した。ただし、奥さんはウィーンに20年住むフィリピン人である。「答は、プファーラー（坊さん）」と言うと、奥さんが運転手の話をしだした。僕も友人も、急になんて無関係の話がはじまったのかなと、いぶかっていたら、奥さんは聞き違えて、プファーラー（運転手）だと思ったと言うのである。プファーラーとファーラーは随分似ている。「何だ、お坊さんか、私もなぜ運転手が一番長生きするのか、分からなかった。変だと思った」と、奥さん。

僕は、かつてウィーンのB夫人の家に、1カ月下宿していたことがある。ウィーン人はカール・ベーム（ウィーン・フィルの指揮者）を崇拜していた。「カール・ベームは、私の神様！」と言う人が沢山いた。

B夫人とお喋りしている時、カール・ベームについて私が言った。「カール・ベームが死にましたね。」ところがB夫人はポカンとして、分からないのである。それで「ウィーン人で、ベームを知らない人がいる。これは珍しい。これだけで何か随筆が書ける」と、私は思った。だが私が日本的に「ベ」と発音したから、彼女は分からないのであった。Böhmであるから、オー・ウムラウト（ö）である。ドイツ語では ae oe ue が ä や ö や ü となって、独得の発音となる。上に2点をつける。それがウムラウトという。ドイツ語で難しいのは、ウムラウトの発音であり、アー・ウムラウト（ä）はアの唇の形でエ、オー・ウムラウトはオの唇の形でエ、と発音する。今度は私ははっきり発音したら、「何だ、カール・ボエムね。そうなのよ、残念だわ。」

これでは、単に私の発音が悪かったというだけで、全然随筆は書けなくなった。

ちなみにオーストリアでは、ae oe ue を、ドイツに比べて、ウムラウトとして発音をしない場合が多い。ドイツではほとんどウムラウト化してしまう。オーストリアでは違う。ウィーンの大政治家 Dr. Karl Luegar は、ルエーガーと発音する、などである。

鉄道列車に乗っていて、コンパートメントでオーストリアの老婦人が、新聞を読んでいる私に、「ドイツ語が読めるか」と言う。「ええ。」「じゃ、読んでみて」、というわけで、音読してみたら「ああ、読める」と言う。これは当たり前で、私はただ発音しただけであり、意味はよくわからないのだった。それでも彼女は読めるとみなすのだった。ドイツ語をただ声を出してあらわすことは、簡単なことなのに。

我々が日本の学校で習うドイツ語は、北ドイツ語である。だからオーストリア語は我々にはより難しい。北ドイツ語のザジズゼゾは、オーストリア語では弱くなり、サシスセソに接近する。オーストリア語は、ドイツ語よりメロディカルである。両者とも単語がかなり違う。という風に違いがある。日本の大学でも南ドイツ語を少し教えて、学生が将来びっくりしないようにしてもらいたい。

私はドイツ語とオーストリア・ドイツ語の関連と区別を、

Gassner/Smonitsch, Kleines Österreich Lexikon. München 1987. で付けている。日本の普通のドイツ語辞典には、違いがあまりついていないからである。もちろん、このレクシコンでも Schludri Wudri (服をひらひらさせる人) とか、 Hudri Wudri (ミー・ハー) のような語は、ない。